

優秀賞

# 見えないうけれど、届く想い

山口県 山口県立徳山商工高等学校二年 國重 莉菜

夏休み、私は初めてお店のキッチンに立った。家でお菓子を作るのが好きだったこともあり、キッチンのアルバイトに応募した。でも、想像していたよりずっと忙しくて、最初のうちは毎日が必死だった。

キッチンでは、お客様の顔が見えない分、「手を止めないこと」が何よりも大切だった。食材の準備、オーダーに合わせた盛り付け、洗い物など、スピードと正確さ、そして周りとの連携が求められる場所だった。

最初は先輩の動きについていくのがやっとで、やろうとしたことを忘れていたり、どこに何が置かれてあるのかすらわからなかったりした。

「私、ここについて役に立てるのかな」。そう思った日もあった。

そんな中、心の支えになったのは、一緒にアルバイトをしていた友達存在だった。もともと仲の良い友達だったけれど、一緒に同じ制服を着て、同じ目標に向かって汗を流すという経験は、学校では味わうことのできない特別なものだった。

仕事の合間に「めっちゃ忙しいね、頑張ろう」と声を

そうして、少しずつできるが増えてきたとき、初めての給料をもらった。封筒を開けた瞬間、うれしさとともに、「あの忙しかった日々が、この中に詰まっているんだ」と思うと、思わずぎゅっと握りしめてしまった。ただのお金じゃなくて、自分が頑張った証として手にしたものだと感じた。それは、家でお菓子を作っていたときには味わえなかった達成感だった。

その日は、友達と、

「やっと初給料だね。」

と言って、帰り道にちよつといいアイスを買って、

「お疲れ様。」

と励まし合った。あの味は、たぶん一生忘れない。

ある日、ピークが終わったあと、先輩がこう言ってくれた。

「最近めっちゃ動き良くなってるね。盛りつけもきれいだし、助かるよ。」

その一言に、心がふわっと温かくなった。直接お客様の「おいしかった」や「ありがとう」の声が聞こえなくても、ちゃんと誰かに見てもらえているという実感が、何よりもうれしかった。

それからは、ただ言われたことをこなすだけでなく、どう動けば全体がスムーズになるかを考えるようになった。ピーク前に食材を用意しておく、在庫が少ないものを見つけ補充しておく、盛りつけの手順を整えるなど、目立つ仕事ではないけれど、そういった小さな積み重ね

かけ合ったり、失敗した時には「大丈夫、次があるよ」

と励まし合ったり、時にはお互いのミスに笑い合うことで、重たい空気も心もふっと軽くできたこともあった。

ある日、オーダーが立て込んで、キッチン内がバタバタしていたとき、食材を取りに行こうとした友達とぶつかりそうになった。ふたりとも焦っていたのに、友達が「ごめんね、でもタイミングばっちりだったね」と笑いながら言ってくれたことで、私もつられて笑ってしまった。その瞬間、どんなに忙しくても、気持ちのゆとりやチームの空気が大事だということに気づいた。

また別の日、友達と「ピーク前に事前に準備を徹底しておこう」と話し合っただけのこと。それがうまく流れにはまり、スムーズに作業が進んだ。そのとき先輩に、

「今日の動き、すごくよかったよ。」

とほめられて、私たちは思わず目を合わせて笑った。

そんな小さな成功体験を積み重ねるうちに、自分の中で「働かって、ただ作業をすることじゃない。誰かと協力して、いい結果を出すことなんだ」という意識が芽生えていった。



が、お店の流れを大きく変えることを知った。

家や学校では気づけなかった、働くことの大変さや、チームで動くことの難しさ。少しずつ、「社会の一員」としての自覚ができた。

そして何より、自分の持つ力に気づくことができた。細かいところに気づいて動く力や、友達と一緒に働いたことで、支え合う力も持ち合わせていると感じた。仲間がいれば、どんなことも乗り越えられる。一人では見えなかった景色が、誰かと一緒なら見えるようになる。そんな経験ができたこの夏は、私にとってかけがえのないものになった。

「見えないところで働く人がいるから、お店はまわるんだよ。」

先輩のその言葉は、私の中で響いている。

私の仕事は、お客様から見えないかもしれない。でも、自分にしかない動きで、誰かを支えている。

そしてそれは、私一人のことだけではない。誰かの当たり前の一日も、いろんな場所で働く人たちの存在により支えられている。どんな仕事だとしても、自分の役割を果たす人がいるからこそ、社会は今日も動き続けている。

それに気づけたことが、この夏いちばんの「感動」だった。